

# ロールシャッハ・テストによる衝動性の研究

## —注意欠陥／多動性障害の衝動性研究の理論的検討—

柳澤 明美 信州大学大学院教育学研究科

今田 里佳 附属教育実践総合センター

### 1 はじめに

ロールシャッハ・テストは、スイスの精神科医 Hermann Rorschach によって考案された投影法による人格検査である。左右対称のインクのしみが描かれたカードを被検者に呈示し、それが「何に見えるか」という反応から個人のパーソナリティ構造を捉えることを目的としたもので、実際の臨床の場で、特に精神医学的診断の際に、最もよく用いられている心理テストのひとつである。ロールシャッハ・テストについては、これまでに多くの研究者によって膨大な研究が積み重ねられてきたが、精神障害や不適応症状の中核的特徴のひとつとされる衝動性についても、このテストで得られる指標との関連について実証的な研究が多数行なわれてきた。

一方、注意欠陥／多動性障害 (Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder : 以下 AD/HD) は、注意の欠陥と衝動性、多動性を特徴とする障害である。近年、学校での不適応行動などから急速に注目を集めるようになり、これまでに非常に数多くの研究が報告され、障害の本質について様々な仮説モデルが提案されている。例えば、Barkley(1995, 海輪訳, 2000)は、衝動性と多動性を AD/HD の障害の中核ととらえた「行動抑制の障害」説を提案している。この説では、AD/HD 児は、行動を抑制し自己をコントロールする能力の発達が遅れているため、状況またはできごとへの反応を抑制できない、と考え、AD/HD 児が衝動的に行動してしまうのは、「何をすべきか知らないのではなく、知っていることをどう行ったらいいのかわからない」ため、とする。また、Sonuga-Barke, Sembi & Smith(1992)は、「遅延嫌悪仮説」を提唱する。Sonuga-Barke et al.は、AD/HD 児の衝動性は、彼らが遅延を嫌がって回避する傾向があるために生じている、と考えており、AD/HD 児は「何をすべきか知っているが(反応を抑制して待たなければいけないのはわかっているが)、やりたくないことはやらない(待ちたくないのを待たない)」として、AD/HD の衝動性を動因の観点から説明している。

それでは、AD/HD の衝動性は、ロールシャッハ・テストの結果にはどのように現われてくるのだろうか。その出現の仕方を見ることによって、AD/HD の衝動性の本質に迫ることができるかもしれない。本稿では、ロールシャッハ・テストによる AD/HD の衝動性研究のための理論的検討を目的として、ロールシャッハ・テストによる衝動性の研究、およびロールシャッハ・テストを AD/HD に適用した先行研究を概観する。

### 2 ロールシャッハ・テストの概要

ロールシャッハ・テストは、インクのしみ(インクプロット)の見え方によって、見る人の心理的な特質を理解しようとするテストである。手続きは、刺激材料として Rorschach が創案した左右対称のインクのしみが描かれた 10 枚 1 組のカードを用い、これを順に被験者に呈示して「インクプロットが何に見えるか」という自由な反応を求め、次に、出された反応について「インクプロットのどの部分が、なぜ、そのように見えたのか」を質問する、というものである。結果は、被験者が図版に何を見たか、という知覚内容、および、どのように見たかという、知覚の形式的な側面を重視して記号

化と得点化を行い、それに基づいて定量的・客観的に解釈を行うのである。

記号化・得点化の方法や解釈法については、図版の創案者である Rorschach が、図版と論文を発表したわずか 1 年後に 37 歳の若さで亡くなり、Rorschach 自身による明確な方法と理論が確立されなかった。そのため、Beck, Klopfer, Hertz, Piotrowski, Rapaport といった後の研究者達が、それぞれの採点法や解釈法を生み出し、独自の体系を発展させた。現在では、これら 5 つの体系を実証データに基づいて統合した、Exner による包括システムの方法が広く採用されている。

Exner の包括システムによる記号化、得点化および解釈の方法は以下の通りである。まず被験者の反応を、①反応領域：プロットのどの部分を用いて反応したか、全体(W)か部分(D, Dd)か、②決定因子：プロットのどのような特徴に基づいて反応を産出したか、主なカテゴリーに、形態(F)、運動(M)、色彩(C)、陰影(C')がある、③反応内容：反応が属する内容の種類、人間(H)、動物(A)、植物(Bt)、風景(Ls)などのカテゴリー、④形態水準：反応がプロットの形態の特徴にどの程度適合しているか、4 段階(+, o, u, -)で判定、⑤平凡性(P)：その反応は一般の人々に高い頻度で生じるものか、⑥組織化活動(Z)：プロットの部分を意味のある方法で統合しているか、⑥特殊スコア：反応内容に通常ではない特殊な特徴があるか(12 種類のスコア)、などについて記号化し、得点化する。そして、得られた得点を、単独または組み合わせて、パーソナリティの特徴を表すクラスターに割り当て、クラスターごとに、Exner の解釈仮説や基準データに照らし合わせて検討する。パーソナリティの特徴を表すクラスターには、統制、状況ストレス、感情、情報処理、認知的媒介、思考、自己知覚、対人知覚のカテゴリーがあり、これらを順に検討することによって、被験者のパーソナリティー構造を多面的に把握していくのである。

### 3 ロールシャッハ・テストと衝動性の研究—人間運動反応と有彩色反応について

ロールシャッハ・テストには衝動性と関係があると考えられているいくつかの指標があり、その代表的なものは、人間運動反応(記号 M)と有彩色反応(記号 C, CF, FC)の 2 種の決定因子である。そこで、これらがどのような理由により衝動性と関係があると考えられているのか、その根拠となる解釈仮説と、それらの仮説の検証を試みた初期の研究について概観していく。

#### (1) 人間運動反応 (M)

人間運動反応は、図版のインクプロットに、人間の行動や人間的な行動を見る反応であり、M と記号化される。例えば、走る、戦う、考える、見る、などである。

Rorschach は、人間運動反応をすべての反応の中で最も重視し、彼自身、いくつかの解釈上の仮説を提供した(片口, 1987)。Rorschach の仮説によると、被験者が M 反応を産出するとき、その人は「筋肉運動感覚(Kinaesthesie)」を経験している、つまり、筋肉に運動をしているような緊張を感じている。そして、M 反応の多い被験者は、空想の世界で運動を経験しているので、現実の運動は抑制する傾向があり、想像生活に引きこもろうとする人である。また Rorschach は、M 反応が被験者の内的生活を表すと主張し、M 反応を多く産出する人ほど、知能が高く、想像性、創造力が豊かであると考えた。しかし、これらの仮説に対する根拠は乏しく、Rorschach 自身、これらの仮説がいずれ実証されるだろう、と述べている(片口, 1987)。

そこで、後の研究者たちは、彼の理論を基にしながらも、それぞれの体系の中で独自の解釈仮説を展開していった。例えば、Klopfer & Davidson(1962, 河合訳, 1964)は、M 反応の知覚には 3 つの主な特色、(1) 静的なインクプロットに客観的には存在しない運動を投影していることより、想像の過

程を含む、(2) 人間像あるいは人間的特性をもった概念を伴うものであり、他人に対して共感する能力を意味する、(3) よく分化した種類の知覚を含む、があり、それゆえ、M 反応には、知能、想像性、価値体系、内的安定性、自己受容性、共感性、自己概念の7つの人格指標が関係している、と述べている。また、Piotrowski(1957, 上芝訳, 1980)は、M 反応が他人との関係を処理するのに繰り返し用いられる明確な傾向を反映するとし、M 反応を多く産出する人は、他人に影響されにくく自分の考えで行動する人であり、自分自身の考えを組織化し発展させるための時間や機会を持っているとする。そして、その結果、そのような人は、他の人より新奇的・創造的で、それでいて適応力もあり、他人と建設的に協調していける独創的な知能がある人である、と述べている。

このように M 反応にはいろいろな解釈仮説が付与されているわけだが、それでは、M 反応が衝動性と関係があるとされている根拠は何なのだろうか。それは、理論家たちに共通している考え方、M 反応は何らかの知的操作と関係があり、知的操作のためには反応の遅延が必要である、という考え方である。つまり、M 反応を形成するためには、目に入ってきた刺激を自動的に翻訳して即時的に反応するのではなく、反応を遅らせてその間に推理や想像のような高度の観念活動を行わなければならない、ということである。従って、M 反応を多く出す者は、外界の刺激に対する衝動的な反応を抑制する者、と考えることができるのである。また、Rorschach が M 反応を産出する際に被験者が筋肉運動感覚 (Kinaesthesie) を感じており、M の多い被験者は実際の運動を抑制する傾向がある、とした仮説を発展させ、さらに Werner & Wapner(1945)の感覚-緊張理論 (Sensory-Tonic Theory) を援用して、M 反応と運動抑制の関係から、M 反応が衝動性の指標となりうる、とする考え方もある。Werner & Wapner の感覚-緊張理論とは、緊張のエネルギーは感覚活動と運動活動の両方に共通し相互に代替可能であるので、感覚の緊張は運動によって、運動の緊張は空想によって発散することができる、と主張する理論である。これに従えば、身体活動を抑制すると空想での運動が増加するので M 反応が増加し、逆に、M 反応を多く産出する人は、空想で運動を経験して緊張を発散する傾向があるので、身体的な運動は抑制させる傾向がある、つまり衝動的に行動する傾向が低い、と考えるのである。

それでは、これらの解釈仮説の検証を試みた研究にはどのようなものがあるのか。次に、M 反応と衝動性、抑制能力についての初期の研究を概観し、併せて M 反応が表す衝動性について考察していきたい。表 1 に M 反応と衝動性に関する主な研究の一覧を示した。

まず着目したいのは、Singer や Meltzoff らによる一連の研究である。彼らが最初に行なったのは、Werner & Wapner(1945)の感覚-緊張理論に基づいた、運動抑制と M 反応についての仮説の検証である。Singer, Meltzoff & Goldman(1952)は、被験者に、実験者の示す合図にあわせて不自然な姿勢で静止させ5分間保持させるという全身の抑制を行なわせると、その後の M 反応数が増加することを、また、Meltzoff, Singer & Korchin(1953)は「New Jersey Chamber of Commerce」というフレーズをできる限りゆっくり書かせるという手や腕の運動の抑制を行なうと、その後の M 反応が増加することを確認し、Werner & Wapner による仮説を検証した。

次に行なわれた研究は、M 反応を多く産出する人が高い抑制能力を示すかどうかの研究であった。そして、抑制能力を運動の抑制から認知的な抑制にまで拡大して検討が行われた。まず、Singer & Spohn(1954)の研究は、運動抑制能力と M 反応の関係を見た実験である。運動抑制の能力の指標として、待合室での行動観察と、フレーズ (「New Jersey Chamber of Commerce」) をゆっくり書かせるテストを実施している。待合室での行動観察は、実験の被験者を待合室で 15 分間待たせるが、そのとき、テーブルの上などにカラフルなパズルなど興味をひくものを置いておき、その間の行動や周囲

表 1 人間運動反応と衝動性に関する主な研究一覧

論文	関連指標	内容
Singer, Meltzoff & Goldman(1952)	M 運動抑制	全身の運動抑制や過活動と M 反応の関係を見た実験。運動抑制後(不自然な姿勢での静止)には M 反応が増加した。ただし、過活動後(美容体操)には変化がなく、美容体操が過活動として機能していなかった可能性について考察している。
Meltzoff, Singer & Korchin(1953)	M 運動抑制	運動抑制(できるだけゆっくりとフレーズを書く)と M 反応の関係をみた実験。運動抑制後に、M 反応の増加がみられたことを報告。
Singer & Spohn(1954)	M 運動抑制 行動評定	待合室での行動評定(どれくらい身動きなどをしていたか)および運動抑制課題(フレーズをゆっくり書く)の成績と、M 反応の数の関係を調べた実験。M を多く出す被験者は待合室での自発的な運動が少なく、フレーズをゆっくり書くことができ、運動抑制に優れていることが確かめられた。なお、待合室での行動は、有色彩反応の合計値 SumC とも関係があり、これは C が周囲に対する反応性と相関するためであると考察している。
Singer & Herman(1954)	M 運動抑制 認知的抑制 行動評定	待合室での行動評定(どれくらい身動きをしていたか)、運動抑制課題(フレーズをゆっくり書く)、TAT、抹消テスト(文字を消していくテスト)、思考的内向性の自己評定と、M 反応数の関係をみた実験。M を多く出す群は、運動の抑制能力や想像力に優れ、内向性傾向が高いことを確かめている。
Levine & Meltzoff(1956)	M 認知的抑制	言語連想による認知的抑制テストの結果と M 反応との関係をみた実験。M を多く出す被験者は認知的抑制の能力にすぐれていることが示された。(また、有色彩反応の合計値 SumC との関係も見ているが、有意な相関はなかった。)
Meltzoff & Litwin(1956)	M 感情の抑制	感情の抑制と M 反応の数の関係をみた実験。被験者に、笑いを起こさせるようなレコードを聞かせたところ、M を多く出す被験者は、少ない被験者よりも、笑いをこらえることに成功し、感情の抑制に優れていることを報告。
Levine, Glass & Meltzoff(1957)	M 運動抑制 認知的抑制	M 反応が抑制過程の指標になりうるかどうかを調べることを目的とした実験。習慣的な運動を抑制する能力のテストとしてウェクスラー・ベルビューテストの Digit symbol テスト(アルファベットの N の鏡像を書く)、認知的抑制能力のテストとして言語連想テストを行なったところ、digit symbol テストで間違える(抑制力がない)被験者は M 反応が少なく、認知的抑制もできなかった。これによる M 反応が抑制過程の指標となることが示された。
Singer, Wilensky & McGaven(1956)	M C 因子分析	ロールシャッハ・テストの結果と、知能テスト、TAT、運動抑制テスト、やる気のテスト、権威者への態度のテスト、行動評定、時間見積り、等の結果を因子分析して検討した研究。4 因子が抽出され、M 反応は運動を制御し衝動を抑制させる因子と人格の内面的側面を表す因子の両方に、C 反応は創造性や情緒的動因、抑制できない活動を示す因子に負荷した。
Siipola & Taylor(1952)	M C 反応時間	自由に反応させた場合と、できるだけ早く反応するよう圧力をかけた場合を比較すると、自由反応条件の方が M が多かった。また、有色彩カードでは、自由反応群より圧力反応群で純粋色彩反応 C が多く、M 反応な長い反応時間と、純粋色彩反応は即時の反応時間と関係していることが示された。
Bieri & Blacker(1956)	M 反応時間	色彩反応よりも M を多く与える被験者の方が、プロットへの反応時間が長く遅延をしがちであることを報告。
Kurz, Cohen & Strazynsky(1965)	M C 時間の見積り	被験者に実験時間の見積もりをさせたところ、M が多く SumC(重み付けした有色彩反応の合計)が小さい者は、実験時間を短く見積もり、時間経過の遅延に耐性があることを示した。

表1 人間運動反応と衝動性に関する主な研究一覧（続き）

論文	関連指標	内容
Kahn(1967)	M 時間的展望	物語を作らせ被験者の時間的展望を調べたところ、M の多い被験者は未来志向で満足の遅延能力が高いことが示された。
Wittenborn(1950)	M C 因子分析	ロールシャッハ・テストの結果を因子分析、4 因子を抽出。M と FC は、形態に重きを置いた反応と同じ因子に負荷し、CF と C はゆるやかな知覚的アプローチを示す因子に負荷した。

への反応性を、部屋のすみで書類作業をしていて被検者を無視しているかのようにふるまっている実験者が、6 段階尺度で評定するものである。フレーズをゆっくり書かせる課題は、フレーズを書くのに要した時間を測定するもので、その所要時間（抑制時間）が長いほど運動抑制能力が高いとした。結果を M 反応を多く出す群と少なく出す群で比較すると、M 反応を多く出す群は、実験室での自発的行動が少なく、フレーズを書く時間が長く、いずれの指標でも運動抑制をよくすることが確認された。また、Meltzoff & Levine (1954)は、運動抑制と認知的抑制に相関があることを確かめた上で、Levine & Meltzoff(1956)の研究で、M 反応と認知的抑制能力の関係を調べる実験を行っている。彼らは認知的抑制能力の指標として言語連想テストの認知的抑制時間を用いているが、このテストの手続きは以下の通りである。まず、被験者に 10 組の簡単なペアの単語（刺激語と連想語）を学習させる。その後、被験者に刺激語を呈示し、学習した連想語以外の単語を答えるよう求め、このとき刺激語呈示から反応までに要した時間を測定する。この所要時間の 10 回の平均値を認知的抑制時間とする。つまり、新しい連想語を見つけるためには元の単語の連想を抑制する必要があるので、この所要時間は認知的抑制の指標となり、時間が短いほど認知的な抑制能力が高い、と考えたわけである。テストの結果、M 反応を多く出す被験者は、認知的抑制能力に優れていることが示され、M 反応が運動抑制のみならず認知的抑制の能力にも関係があることが検証された。

次いで、Meltzoff & Litwin(1956)は、感情の抑制能力と M 反応の関係についても検討している。この実験では、被験者に滑稽な BGM と伝染性の笑いを録音したレコードを聞かせ、笑いの表出を抑えられるかどうかで感情の抑制能力を判断している。M 反応を多く出す被験者と少ない被験者で笑いの表出を比較したところ、予め笑わないように教示しなかった場合には両者に差がなかったにもかかわらず、笑わないよう教示した場合には、M 反応を多く出す被験者群の方が、笑いを表出せずにレコードを最後まで聞いた人数が多いという結果が得られ、M 反応が感情の抑制にも関係あることが示された。なお、Meltzoff & Litwin は、感情の抑制には、運動の抑制（歯をくいしばって笑いをこらえるなど）と認知の抑制（悲しいことを考えて笑いをこらえるなど）の両方の側面があると考察している。

さらに、Singer, Wilensky & McGaven(1956)は、ロールシャッハ・テストの結果と、知能テストや行動評定、TAT、運動抑制テスト、やる気や権威者への態度を見るテスト、時間見積りなど、16 種のテスト結果を因子分析した研究を報告している。因子分析の結果、①運度を抑制し衝動を抑制させる因子、②人格の内面的側面を表す因子、③野心や達成要求を表す因子、④創造性や情緒的動因を表す因子、の 4 因子が抽出され、M 反応は①と②に負荷することを見出し、M 反応を産出しやすい人の特徴を、衝動的な反応を抑制して事前に計画して協力できるタイプ、と説明している。

また、これらの一連の研究以外に、着目すべき興味深い研究がある。それらは反応時間や時間の見積もりなどの時間的な要因と M 反応との関係について調べた研究である。例えば、Bieri & Blacker(1956)の反応時間に関する実験は以下のようなものである。手続きは、被験者にロールシャッハ・テストの図版 1 枚につき 1 つずつ反応するよう教示し、図版呈示から反応までの時間を測定する。

そして、この手続きを再度繰り返して 20 の反応時間のデータを得、得られた反応時間と M 反応、有彩色反応との関係を見る。その結果、Bieri & Blacker(1956)は、有彩色反応よりも M 反応を多く出す被験者は反応時間が長く、また、M 反応を出す時の反応時間は、有彩色形態反応 CF を出す時の反応時間よりも長いことを確認した。そして、M 反応の産出に時間がかかるのは、外的な刺激を内的に変容させる過程が必要であるため、と考察している。また、Kurz, Cohen & Strazynsky(1965)は、時間の見積もりと M 反応、有彩色反応との関係を見ている。Kurz et al.は、被験者に 4 秒、14 秒、26 秒および 12 分の時間間隔と実験の総所要時間(約 2 時間)を見積もらせた。その結果、すべての被験者は短時間の時間を長く見積もる傾向があるが、M 反応が少なく有彩色反応の合計 (SumC) が多い被験者はその傾向が顕著であること、また、すべての被験者が総実験所要時間を短く見積もる傾向があるが、M 反応が多く SumC が少ない被験者はその傾向が顕著であることを見出した。そして、時間の見積もりは、満足の遅延能力と関係があるとされているので、M を少なく出す人は満足を遅延させるのが困難で時間の速い経過に高く動機づけられている人、反対に M を多く出す人は、遅延に対する耐性が備わった人である、と考察している。Kahn(1967)は M 反応と時間的展望の関係を Time-Span Technique という手法を用いて調べている。Time-Span Technique は、被験者にストーリーを作らせる、実験者がストーリーの冒頭を作ってその続きを被験者に作らせる、作ったストーリーにストーリー中の時間経過に従って得点を割り当てる、という手続きで行うテストである。Kahn は子どもを被験者にテストを行い、M 反応の多い子どもは未来志向の時間的展望を持ち、M 反応の少ない子どもの時間的展望は現在志向であることを確認し、時間的展望は満足の遅延能力と関係があるとされていることから、M 反応の多い子どもは満足の遅延が可能であり、M 反応の少ない子どもは即時の報酬に関心を持っている、と考察している。

以上の研究をまとめると、まず、Werner & Wapner(1945)の感覚-緊張理論の検証実験を出発点とした一連の研究があった。それらは、M 反応の産生と運動抑制能力、認知的抑制能力、感情抑制力との相関を順に確かめていったものである。これらの研究で M 反応の産出と関係があるとされた衝動や抑制の性質について考察してみると、抑制された衝動は、刺激に対して反射的に沸き起こってくる抵抗不可能な衝動というよりも、ある程度本人の意志の力によってコントロールできる性質のものであり、抑制能力は、動機付けの有無やそれに伴う意志の強さに関係するもの、とすることができるのではないだろうか。このことは、Meltzoff & Litwin(1956)の笑いの表出実験に最も典型的に表れていると思うのだが、笑いの表出という衝動は、笑わないように教示されて動機付けが与えられれば抑制できる、また、歯をくいしばる、悲しいことを考えるなど、意志の力によって抑制できるのである。

また時間の要因についての研究から、M 反応の産出には長い反応時間を要する傾向があり、M 反応を多く産出する被験者は時間の遅延に対する耐性が高く、反応を即時的、衝動的に行ってしまう傾向から自由である、ということが検証された。このことから再び、M 反応と関係する衝動や抑制の性質を考察してみると、やはり、M 反応の産出には意志や動機付けが深く関わってくると思われてくる。すなわち、M 反応は知的に高く統合された反応であるので、M 反応を産出するときには、反応形成の過程で他のより安易な反応の選択肢も持っていると考えるのが妥当である。そして、その選択肢の中から M 反応を選ぶためには、安易な選択に屈せず敢えて遅延を行おうとする意志や動機付けが必要であると考えるからである。

## (2) 有彩色反応 (C, CF, FC)

有彩色反応とは、反応の形成にあたってプロットの色彩を決定因として用いた反応である。プロッ

トの色彩的特徴にのみ基づき形態を無視した純粹色彩反応 (C:例えば, 血, 絵の具), プロットの色彩的特徴と形態的特徴に基づく反応であるが色彩的特徴が優勢である色彩形態反応 (CF:例えば, 燃え上がっているオレンジ色の炎), 逆に形態的特徴が優勢であり副次的に色彩的特徴を用いた形態色彩反応 (FC:例えば, 赤いチョウ, 青い旗) の3種類に分類される。

Rorschach は, 色彩に対する反応が感情と関係すると考えた。その根拠は, 赤が情熱的であり, 緑や青が落ち着いた感じがする, というように, 古来より色彩が人々に何らかの感情を引き起こすことが知られている, ということであり, 特別な理論的な裏づけは持たなかったようである。つまり Rorschach は, 色彩と感情の関係をア・プリオリな前提としてとらえたのである。そして彼は, 色彩をどの程度形態に合わせて使用するかが, 情緒的な興奮のしやすさの指標となると考え, 純粹色彩反応 (C), 色彩形態反応 (CF), 形態色彩反応 (FC) の順に感情的衝動の安定度を反映するとした。さらに彼は, C 反応に 1.5 点, CF 反応に 1.0 点, FC 反応に 0.5 点を与えて重み付けした合計 (SumC) が情緒的反応性の程度を示し, また, FC 反応の C+CF 反応に対する比率が, 衝動性や感情の統制の程度を示す尺度になると考えた。

Rorschach 以降の理論家たちも, Rorschach の考えを基本的に踏襲している。例えば Schachtel (1943) は, 色彩と感情の類似性について述べ, Rorschach が理論的な説明なしに色彩と感情の関係について述べたことは理解できる, としている。Schachtel によると, 色彩の知覚は, 受身的で即時的な過程であって知覚者側の行動や活動を要求しないものであり, 一方, 感情反応は意志による結果ではなく, 何かに捕らえられた時に自動的に生じるものであるため, 両者は類似している, という。また, 有彩色反応を, 色彩と形態の優位性によって3種に分類し, それぞれを感情や衝動の統制の程度と関係づけることも, 研究者たちの解釈に一致するところである。つまり, 色彩優勢の C 反応や CF 反応は, 色彩の知覚が形態の知覚に比べて即時的な過程であり認知的な活動を必要としないことから, 感情の統制の弱さや衝動抑制の不可能さを示し, また, 形態優勢の FC 反応は, 形態と色彩を適当に融合させた統合的な反応であることから, 情緒的な統制が可能であることを示すと考えられている。

それでは, 有彩色反応と衝動性の関係についての初期の研究を概観する。表 2 に主な研究の一覧を示した。まず, 有彩色反応と反応時間の関係を論じた研究がいくつかある (Stein, 1949; Siipola & Taylor, 1952 など)。これらは, 被験者にできるだけ早く反応するよう求めた場合に, 純粹色彩反応 C が増加することを報告したものである。この結果から, Schachtel (1943) のいうように, 色彩には受身的・即時的特徴があることが理解できる。すなわち, できるだけ早く反応しなければならない場合には, 被験者はその人の内的な資質を利用してインクのしみに意味づけを行うための遅延を許されないため, 真っ先に目に入ってきた刺激に対して反応してしまうことになり, その真っ先に目に入る刺激が色彩そのものなのである。

これら反応時間を扱った研究以外には, 実際の行動やパフォーマンスと有彩色反応の直接の相関を検討した研究がある。例えば, Gardner (1951) は学生を被験者とし, 被験者をよく知っている知り合いが評定した衝動性得点と, Stormont & Finney (1953) は神経精神病の入院患者の暴力行動と, Townsend (1967) は情緒障害児のための施設に入所している少年の攻撃的行動の評定値と, それぞれ有彩色反応との相関を調べている。これらの研究では, 主に有彩色反応における色彩と形態の統合度に焦点が当てられており, いずれの研究でも形態よりも色彩が優勢な C 反応や CF 反応が衝動的攻撃的行動と関係が深いことが確かめられている。

因子分析の手法を用いて有彩色反応の性質を検討した研究もある (Wittenborn, 1950; Singer, Wilensky & McGaven, 1956 など)。Wittenborn (1950) は, 92 人の大学生のロールシャッハ・テス

表2 有色彩反応と衝動性に関する主な研究一覧

論文	関連指標	内容
Stein(1949)	C 反応時間	できるだけ早く反応するように求めたところ、純粹色彩反応 (C) 反応が増加、反応の即時性との関係が示された。
Siipola & Taylor(1952)	M C 反応時間	自由に反応させた場合と、できるだけ早く反応するよう圧力をかけた場合を比較すると、自由反応条件の方が M が多かった。また、有色彩カードでは、自由反応群より圧力反応群で純粹色彩反応 C が多く、M 反応な長い反応時間と、純粹色彩反応は即時の反応時間と関係していることが示された。
Kurz, Cohen & Strazynsky(1965)	M C 時間の見積もり	被験者に実験時間の見積もりをさせたところ、M が多く SumC(重み付けした有色彩反応の合計) が小さい者は、実験時間を短く見積もり、時間経過の遅延に耐性があることを示した。
Wittenborn(1950)	M C 因子分析	ロールシャッハ・テストの結果を因子分析、4 因子を抽出。M と FC は、形態に重きを置いた反応と同じ因子に負荷し、CF と C はともにゆるやかに自然発生的な知覚的アプローチを示す因子に負荷した。
Singer, Wilensky & McGaven(1956)	M C 因子分析	ロールシャッハ・テストの結果と、知能テスト、TAT、運動抑制テスト、やる気のテスト、権威者への態度のテスト、行動評定、時間見積り、等の結果を因子分析して検討した研究。4 因子が抽出され、M 反応は運動を制御し衝動を抑制させる因子と人格の内向的側面を表す因子の両方に、C 反応は創造性や情緒的動因、抑制できない活動を示す因子に負荷した。
Holtzman(1950)	C 行動評定	行動に基づく評定とロールシャッハ・テストの結果から、衝動性を評価するためのリストと衝動性スコアを提案した研究。リストとスコアは、主として FC, CF, C の比率に基づき、衝動性が色彩と形態のバランスと関係が深く、また得られた衝動性スコアと衝動的行動の評価点の相関が高いことを報告。
Gardner(1951)	C 行動評定 PF テスト	PF テスト、知り合いによる衝動性の評定とロールシャッハ・テストの結果を検討したところ、高頻度の CF+C 反応は、衝動的または攻撃的行動と相関があった。
Storment & Finney(1953)	C 行動	ロールシャッハ・テストのプロトコールの内容や得点から、暴力行動群と非暴力行動群を予測できるかどうかを調べたところ、プロトコールから予測できなかったが、高頻度の CF+C 反応は、衝動的や攻撃的行動と関係があった。
Sommer & Sommer(1958)	C 行動評定	攻撃的な内容の色彩反応をする被験者は、行動評定の結果、実際の行動でも攻撃であることを示した。
Townsend(1967)	C 行動評定	攻撃行動についての行動評定とロールシャッハ・テストの結果を検討した結果、高攻撃群は C と CF 反応が多く、低攻撃群には M>CF の被験者が多かった。
Harrington(1954)	C 欲求不満耐性 テスト	実験的な欲求阻止状況のもとにある被験者に、一定の課題をやらせたところ、FC 優位群は CF+C 優位群よりも成績がよく、情緒的統制や欲求不満に対する耐性が高いことを見出した。

トの結果から 20 のスコアを選んで因子分析を行っている。その結果、4 因子を抽出し、CF 反応と C 反応はともに統制されない自然発生的な知覚的アプローチを示す因子に負荷したが、FC 反応はむしろ M 反応と同じ因子に負荷することを見出し、CF 反応と FC 反応が表面的には類似しているが異なった性質のものであることを示している。また、M 反応の項でも紹介した Singer et al.(1956)の研究では、彼らが抽出した 4 因子のうち、C 反応が創造性や情緒的動因、抑制できない活動を示す因子に負荷したことを報告している。



また、Holtzman(1950)は、ロールシャッハ・テストのスコアから衝動性や感情のコントロールの欠如を評価するリストを提案している。これは、Holtzman が行った、ロールシャッハ・テストによってさまざまな性格特性を評価することを試みた一連の研究のうちのひとつであるが、その手続きは以下の通りである。まず被験者として男子大学生を、それぞれが他の被験者全員と親しい間柄であるように慎重に選び、各被験者に、自分自身と他の被験者全員を、衝動性を含む 10 の特性について順位付けさせる。そしてこの順位の平均値を各被験者の行動の基準値とし、これに基づいて、各性格特性に関係するロールシャッハ・テストの項目を抽出するのである。その結果、衝動性に関係のある項目としては、FC、CF、C 反応の比率や、色彩によって即時に(5 秒以内)に引き起こされた発言などの 8 つであった。彼は、さらに抽出した項目に重み付けのための得点を与えて衝動性スコアを求めることを提案し、これによると、C のみで CF、FC がみられないときには衝動性スコアが高く、FC のみで CF、C がみられないときは低くなるようになっている。彼は、このスコアが行動の評価点と相関が高かったことを報告し、色彩や色彩と形態のバランスが衝動性と深く関係があることを示している。

色彩の知覚が、人間にとって即時的、受動的で、最も注意を奪われやすい刺激であることを認めるならば、色彩優勢である C 反応や CF 反応によって表される衝動性は、自然にわきおこってしまふ衝動に対して、反射的、自動的な反応を抑制することができなかった結果と考えることができるだろう。本人の意志とは無関係という点で、より原始的で未成熟な衝動性ということができるかもしれない。しかし仮に CF 反応が即時的にではなく熟慮の上に出された場合には、その人は意図的により色彩に重きをおいた選択をした可能性があり、この考察はあてはまらない。特にその反応が形態の特徴に正確にあてはまっている場合には、FC 反応と同じく、自然発生的な衝動に対する適切な抑制力を表している可能性がある。以上、有彩色反応と衝動性についてまとめると、FC 反応や熟慮的な CF 反応に対して、即時的な C 反応や CF 反応がどの程度優っているかが、自然発生的な衝動を抑制することができないという意味での衝動性を表していると考えられるのではないだろうか。

このように考察をすすめてくると、人間運動反応と有彩色反応は、それぞれ衝動性の異なった側面を表しており、またその相対的なバランスによっても異なった解釈ができる可能性がわかった。本稿では、人間運動反応と有彩色運動のみをとりあげたが、その他のロールシャッハ・スコアでも衝動性に関係があるとされているものがある(例えば、エクスナー法での D スコアや良質形態反応の割合  $F+%$ ; Exner, 1986, 秋谷ら監訳, 1991)。また、ロールシャッハ・テストでは、指標を単独ではなく組み合わせて検討したときに明らかにされる特性もある。それらについても考察していくことによって、衝動性という概念をより多面的に理解できると考えられた。

#### 4 ロールシャッハ・テストによる AD/HD の先行研究について

最後に、AD/HD や多動児、衝動児とロールシャッハ・テストの関係を見た先行研究について概観する。実際のところ、ロールシャッハ・テストによる AD/HD の研究例はあまり多くはない。アメリカ心理学会による心理学関連文献のデータベース PsycholINFO を用いて、1887 年から最新(2003 年 3 月)のデータを、AD/HD や多動・衝動児とロールシャッハ・テストをキーワードとして検索すると、わずかに 9 件が該当するのみである。

まず、9 件中 7 件が、AD/HD 群と統制群のスコアを比較して、残りの 2 件(Locke, 1999; Dean, 1992)が AD/HD 群と標準データのスコアを比較して、両者の間に差があるかどうかを調べたものである。9 件とも何かしらの統計的な有意差が見られたことを報告しているが、内 1 件(Evert, 1991)は、特に

表3 ロールシャッハ・テストによるAD/HDと多動・衝動児の先行研究

文献	内容
Gordon & Oshman(1981)	教師によって多動と評定された少年群と統制群各 20 人について、16 のロールシャッハ・スコアを比較。多動児は、M 反応と人間反応が少なく、動物反応が多かった。また、多動群の中では年齢による傾向があった。
Ebert (1991)	20 人の ADHD 群と 13 人の統制群のロールシャッハ・テストのスコア (エクスナー法) を比較。有意差があったのは、D, W : D, 孤立指標, X%, F+%, X-%, PER のみで、特に理論的に期待されたものではなかった。ADHD 児の鑑別診断に、ロールシャッハ・テストは特別有用ではない可能性が示唆された。
Dean(1992)	ADD と診断された成人患者に、エクスナー法によりロールシャッハ・テストを実施。また子ども時代の症状を確かめるため、コナーズの親による評定尺度を実施。ADD 群は、エクスナーによるノルムデータと、感情の調節 (X+%) で有意差があった。また、ADD と診断されている成人は、予測よりもよく機能しているようだった。
Osborne(1993)	クリニックに紹介されてきた学齢期の 52 人の ADHD と 26 人の抑うつの子どものロールシャッハスコアを比較。採点はエクスナー法で行った。ADHD 群と抑うつ群の差は、抑制の能力と状況ストレス、感情に表れた。ロールシャッハ・テストは、他のアセスメントと併用すれば、ADHD と他の情緒障害児との鑑別診断に有効と考えられた。
Bartell & Solanto (1995)	24 人の ADHD と診断された子どものエクスナー法によるロールシャッハ・テストのスコアを、正常群と比較した。ADHD 群は、正常群と比較して、CF が多く、FC:CF+C が低く、M 反応が少なく、 $\frac{\text{sumM}}{\text{WsumC}}$ と $\frac{\text{sumM}+\text{WsumC}}$ 比が低く、X-%が悪く、D 反応が同数かより多かった。
Cotugno (1995)	ADHD と診断されている 5 歳から 6 歳の 40 人の子どものロールシャッハテストの反応パターンを検討し、臨床的な対照群と正常の対照群と比較した。ADHD 群と臨床群は、正常群と比べて感情負荷刺激を回避し(SumC が少ない)、自己知覚や対人知覚、現実を正しく知覚する能力が限定的で、抑うつ気味だった。ADHD 群はこりつや不快の強い感情を顕著に示し、社会的に溶け込んでおらず、意思決定を避け依存的であった。
Funkhouser(1997)	6 歳から 18 歳の病院の外来に紹介されてきた 120 人を対象に、ロールシャッハ・テストの結果と、Aschenbach(1991)の子どもの行動チェックリストと教師評定の衝動性の結果を比較した。M 反応と Zf スコアが教師評定と有意に負の相関があり、2 個の M 反応をカットオフポイントとして衝動的-非衝動的を正しく弁別でき、ロールシャッハが衝動性の査定に有用であることが示された。
Locke (1999)	ロールシャッハ・テストが、成人の ADHD の鑑別診断に有用かどうかを調べた研究。19 人の ADHD 群と 7 人の非 ADHD 群のスコア (エクスナー法) を比較したところ、11 のスコアで統計的な有意差があった。ADHD 群が低かった得点は、Aft, CF, X+%, DQv/+, EA, es, FC, H, M。ADHD 群が高かった得点は、X%, L。
Bridwell (2000)	成人の ADHD 群と性別、年齢をマッチさせた統制群で、ADHD と関係のあると思われる 5 つの変数 ( $\lambda$ , F+%, X+%, X-%, Zd) について統計的分析を行った。性別と ADHD の 2 要因分散分析を行ったところ、X+%と X%で交互作用が優位であった。他の有意差はなかった。

理論的に期待されたスコアでの差ではなく、ロールシャッハ・テストを AD/HD の鑑別診断に用いることに懐疑的な姿勢を示している。また、9 件中 2 件(Dean, 1992; Funkhouser, 1997)が、外的基準として行動のチェックリストとの相関を見ており、Funkhouser(1997)は CBCL(Aschenbach, 1991)の教師による行動評定がロールシャッハ・テストの 2 つのスコアと相関があったことを報告している。被験者の年代別では、成人を対象にした研究が 4 件、子どもを対象にした研究が 5 件であった。

また、AD/HD 群と対象群とで、M 反応や有彩色反応、抑制能力で有意差があると報告している研究は 4 件 (Osborne, 1993 ; Bartell & Solanto, 1995 ; Cotugno, 1995 ; Locke, 1999) であるが、但し、Cotugno は AD/HD 群が感情刺激を回避する (SumC が少ない) という予想とは逆の結果を得ている。

このように、先行研究では、AD/HD に特徴的なロールシャッハの傾向が、必ずしも明確にはされていないようである。その理由として、これらの研究が主に AD/HD の鑑別診断や人格理解を目的としたもので、冒頭に述べたような障害の本質についての仮説モデルと照らし合わせてみるなど、衝動性について踏み込んだ考察を行っていないためではないか、と考えられた。

## 5 まとめ

本稿で概観したロールシャッハ・テストの衝動性研究から、人間運動反応と有彩色反応がそれぞれ衝動性の異なった側面を表しており、また、その相対的なバランスによって異なった解釈ができる可能性がわかった。また、これら 2 種の反応以外の指標についても詳しく検討していくことによって、衝動性という概念をより多面的に理解できると考えられた。

一方、ロールシャッハ・テストによる AD/HD の先行研究をレビューしたところ、AD/HD に特徴的なロールシャッハ傾向というものは必ずしも明らかにされていなかった。その理由として、文献の中には AD/HD と人間運動反応や有彩色反応との関係等に言及した研究もあったものの表面的な検討にとどまり、AD/HD の衝動性の本質にまで踏み込んだ考察が行われていないためと考えられた。

そこで、今後の研究としては、ロールシャッハ・テストの結果を、AD/HD の障害の本質を解明しようとする研究と融合させていくことが有用なのではないかと思われる。具体的には、AD/HD の本質についての仮説モデルと照らし合わせた検討である。冒頭で、主な仮説モデルとして、Barkley (1995, 海輪訳, 2000) の行動抑制の障害説と Sonuga-Barke et al. (1992) の遅延嫌悪仮説をあげた。例えば、これらのモデルとロールシャッハ・テストによる衝動性について考察してみると、Barkley による行動抑制の障害は、刺激に対する反応を抑制できないという点から、即時的に出される有彩色反応 C や CF との相関が高く、また Sonuga-Barke et al の提唱する遅延嫌悪は、知的要素や動機付けに関わるという点で人間運動反応の欠如によって表されると考えられる。このようにして、他のロールシャッハ・スコアやスコアの組み合わせについても検討していくのである。現在のところ、仮説モデルの検証研究はパソコンを用いた実験室的課題による方法が主流である。Barkley の行動抑制の障害説は、Logan, Shacter, & Tannock (1997) の停止信号課題、Sonuga-Barke et al. の遅延嫌悪仮説は Sonuga-Barke et al. (1992) の遅延選択課題等が用いられており、それぞれに AD/HD の衝動性や抑制能力との相関を示す報告が行われている。そこで、ロールシャッハ・テストの結果と実験室的課題の成績の相関を検討していくことは、有効な方法であると思われる。また、その際に、AD/HD を診断するためのチェックリストや衝動性についての下位尺度を持つ人格テスト等も実施し、検討に含めていくことが多面的な理解のために有用と思われる。

最後に、本稿ではロールシャッハ・テストの衝動性に焦点を合わせてきたが、ロールシャッハ・テストは、衝動性のみならず、被験者の自己に対する認識や対人場面での行動傾向、情緒的な状態やストレスなど、幅広い情報を提供する。AD/HD の人の多くが情緒的な二次障害を抱えていると言われるが、ロールシャッハ・テストはこのような問題も浮き彫りにすることができるだろう。ロールシャッハ・テストが、AD/HD に悩む人々に対して、有効な援助案を提案するための一助となることを期待している。

## 6 文献

- Achenbach, H.M. 1991 Integrative guide for the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF profiles. Burlington, University of Vermont.
- バークレー R. A. 海輪由香子(訳) 2000 ADHD のすべて ヴォイス  
(Barkley, R. A. 1995 Taking charge of ADHD: The complete authoritative guide for parents. The Guilford Press.)
- Bartell, S. S. & Solanto, M. V. 1995 Usefulness of the Rorschach Inkblot Test in assessment of attention deficit hyperactivity disorder. *Perceptual and Motor Skills*, 80, 531-541.
- Bieri, J., & Blacker, E. 1956 External and internal stimulus factor in Rorschach performance. *Journal of Consulting Psychology*, 20, 1-7.
- Bridwell, C. R. 2000 Performance effects of adult attention deficit hyperactivity disorder on the Rorschach Inkblot Test. *Dissertation Abstracts International*, 61, 4, 2191.
- Cotugno, A. 1995 Personality attributes of attention deficit hyperactivity disorder (ADHD) using the Rorschach Inkblot Test. *Journal of Clinical Psychology*, 51, 554-561.
- Dean, D. J. 1992 Rorschach responses in adults diagnosed with attention deficit disorder. 53, 1953.
- Ebert, M. M. 1991 An analysis of Rorschach as a tool to differentiate children with attention deficit hyperactivity disorder from controls. *Dissertation Abstracts International*, 52, 4972.
- エクスナー J. E. 秋谷たつ子・空井健三・小川俊樹(監訳) 1991 現代ロールシャッハ・テスト体系(下)  
(Exner, J. E. 1986 *The Rorschach: A Comprehensive System Volume 1: Basic Foundations* (Second Edition).
- Funkhouser, B. L. 1997 Rorschach measures of impulsivity in clinic-referred children. 58, 6, 3353.
- Gardner, R. Q., 1951 Impulsivity as indicated by Rorschach Test factors. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 464-468.
- Gordon, M. & Oshman, H. 1981 Rorschach indices of children classified as hyperactive. *Perceptual and Motor Skills*, 52, 703-707.
- Harrington, R.W. 1954 Maladaptive responses to frustration predicted from Rorschach color responses. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 455-458.
- Holtzman, W.H. 1950 Validation studies of the Rorschach test: Impulsiveness in the normal superior adult. *Journal of Clinical Psychology*, 6, 343-347.
- Kahn, P. 1967 Time span and Rorschach human movement responses. *Journal of Consulting Psychology*, 31, 92-93.
- 片口安史 1987 改定 新・心理診断法 金子書房  
クロッパー B. ・デビッドソン H.H 河合隼雄(訳) 1964 ロールシャッハ・テクニク入門 ダイアモンド社  
(Klopfer, B. & Davidson, H.H. 1962 *The Rorschach technique - An introductory manual*. Harcourt, Brace & World, Inc.)
- Kurz, R. D., Cohen, R., & Strazynsky, S. 1965 Rorschach correlates of time estimation. *Journal of Consulting Psychology*, 39, 379-382.
- Levine, M., & Meltzoff, J. 1956 Cognitive inhibition and Rorschach Human Movement Responses. *Journal of Consulting Psychology*, 20, 119-122.
- Levine, M., Glass, G. & Meltzoff, J. 1957 The inhibition process. Rorschach human movement response and intelligence, 21, 45-49.
- Locke, S. R., 1999 Adult attention deficit disorder: Its impact on Rorschach scores. *Dissertation Abstracts International*, 60, 2, 850.
- Logan, G. D., Schacter, R., & Tannock, R. 1997 Impulsivity and inhibitory control. *Psychological Science*, 8, 60-64.
- Meltzoff, J. & Litwin, D. 1956 Affective control and Rorschach human movement responses. *Journal of Consulting Psychology*, 20, 463-465.
- Meltzoff, J., & Levine, M. 1954 The relationship between motor and cognitive inhibition. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 355-358.
- Meltzoff, J., & Singer, J. L., & Korchin, S. J. 1953 Motor inhibition and Rorschach movement responses: a test of the sensory tonic theory. *Journal of personality*, 21, 400-410.
- Osborne, M. L. 1993 Rorschach comparison of clinic-referred, attention-deficit hyperactivity disorder and depressed school-aged children. *Dissertation Abstracts International*, 54, 1108
- ピオトrowski Z. A. 上芝 功博(訳) 1980 知覚分析—ロールシャッハ法の体系的展開 新曜社  
(Piotrowski, Z. A. 1957 *Perceptanalysis: A fundamentally reworked, expanded and systematized Rorschach method*. New York: Macmillan.)
- Schachtel, E. J. 1943 On color and affect. *Psychiatry*, 6, 393-409.
- Siipola, E., & Taylor, V. 1952 Reaction to inkblots under free and pressure conditions. *Journal of Personality*, 21, 22-47.
- Singer, J. L. & Spohn, H. E. 1954 Some behavioral correlates of Rorschach's experience type. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 1-9.
- Singer, J. L., Meltzoff, J., & Goldman, G. D. 1952 Rorschach movement response following motor inhibition and hyperactivity. *Journal of Consulting Psychology*, 16, 359-364.
- Singer, J. L., Wilensky, H., & McCraven, V. G. 1956 Delaying capacity, fantasy, and planning ability: A factorial study of some ego functions. *Journal of Consulting Psychology*, 20, 375-383.
- Singer, J.L., & Herman, J. 1954 Motor and fantasy correlates of Rorschach human movement responses. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 325-331.
- Sommer, R. & Sommer, D. T. 1958 Assaultiveness and two types of Rorschach color responses. *Journal of Consulting Psychology*, 22, 57-62.
- Sonuga-Barke, E.J.S., Sembi, S., & Smith, J. 1992 Hyperactivity and delay aversion I: The effect of delay on choice. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 33, 387-398.
- Stein, M. I. 1949 Personality factors involved in the temporal development of Rorschach responses. *Journal of Projective Techniques*, 13, 355-414.
- Storment, C. T., & Finney, B.C. 1953 Projection and behavior: A Rorschach study of assaultive mental hospital patient. *Journal of Projective techniques*, 17, 349-360.
- Townsend, J., 1967 The relation between Rorschach signs of aggression and behavioral aggression in emotional disturbed boys. *The Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 31, 13-21.
- Werner, H. & Wapner, S. 1945 Motion and motion perception. *Journal of Personality*, 19, 317-327
- Wittenborn, J. R., 1950 A Factor analysis of Rorschach scoring categories. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 261-267.